

(西暦) 2019年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名 (注: 学位論文題名が英語の場合は和訳をつけること)

リハビリ入院中の脳卒中片麻痺者における行為能力の認識誤差に関する研究
～座位ファンクショナルリーチを用いた検討～

学位の種類: 修士 (健康科学)

首都大学東京大学院

人間健康科学研究科 博士前期課程 人間健康科学専攻 ヘルスプロモーションサイエンス学域

学修番号 15899602

氏名: 野口 隆太郎

(指導教員名: 樋口 貴広)

注: 1ページあたり 1,000 字程度 (英語の場合 300 ワード程度) で、本様式 1～2 ページ (A4 版) 程度とする。

本研究では、リハビリ病院入院中の脳卒中片麻痺者を対象に、座位ファンクショナルリーチの予測値と実測値、および認識誤差を用いて転倒との関連を検証した。

リハビリ病院とは脳卒中発症後に集中してリハビリを行う医療機関である。発症早期ほど転倒危険性が高いこともあり、リハビリ病院では非常に多くの脳卒中者の転倒が発生している。一度転倒を経験すると不安や恐怖心からリハビリが円滑に進みにくく、骨折などを呈し脳卒中以外の要因で生活の再獲得に至らないこともある。転倒を引き起こす要因として運動機能、思考力の低下などは重要な要因であるが、身体機能が低下している場合でも転倒しない脳卒中者や、身体機能が高い状態でも転倒する脳卒中者の両方を臨床上経験することがある。このことは、身体機能や思考力以外に問題がある可能性を示している。高齢者研究において、自身の能力に見合った適切な行動の選択と転倒との関連が多く報告されている。脳卒中者片麻痺者転倒の有無についてもこの適切な行動に対する判断が重要な要因となるのではないかと考える。

そこで、リハビリ病院入院中の脳卒中片麻痺者の転倒を自身の出来る動作、出来ない動作をどのように認識しているかを、認識誤差の課題を用いて検証することとした。対象は、転倒が非常に多く生じるとされているリハビリ病院入院早期の脳卒中片麻痺者と

し、2つの実験を通して、行為能力の認識誤差と転倒との関係を確認した。認識誤差には、入院早期の脳卒中者でも実施可能な座位ファンクショナル・リーチテストを応用した予測値と実測値の計測を行い、認識誤差を算出することとした。認識誤差の計測とそれ以前に生じた過去の転倒の関係性の確認を行うことを実験1とした。実験2として、認識誤差の計測をリハビリ病院入院早期に実施し、片麻痺者に生じるその後の転倒の関係を確認することとした。

実験1では、転倒片麻痺者と非転倒片麻痺者の2群のリーチ実測値と予測値、認識誤差の比較を行い、実測値リーチ距離に差がないことの確認と、転倒片麻痺者において、認識誤差の過小評価傾向が少ないことが確認できた。つまり、転倒を経験している脳卒中者と転倒していない脳卒中者に実際に遠くに手を伸ばす能力に違いはないが、どの程度手を伸ばせるかの判断に差があることが確認できた。

実験2では、認識誤差を入院早期に確認し、過大評価群と過小評価群の2群に分け、その後の2カ月間の転倒発生および、認識誤差の変化の経過を追った。認識誤差の問題があった場合は、その後の入院期間中に転倒が生じやすのではないかと考えていたが、実験の結果、過大評価群において転倒が明らかに多いということは確認できなかった。これは、病院という特性上患者の安全を守ることは重要な責務であるため、過大評価群が転倒しやすい印象はあったとしても、その転倒を防ぐ対策がとられやすく、転倒が起きていなかったことも考えられる。そこで、入院中の見守り期間について両群で比較したところ、過大評価群の方が入院中の見守り期間が非常に長く、転倒を防ぐかわりを医療従事者がとっていることが確認できた。2つの実験を通して、行為能力の認識誤差が実際の転倒の予測指標となりえる可能性、また、臨床で従事している医療関係者が、患者を見たときに危険と感じる主観的な判断を証明できる指標となる可能性があることが確認できた。